令和６年度　学校評価

本年度の重点目標	自ら考え、自らの目標に向かって主体的で積極的に学び続ける習慣を身に付けさせ、これからの複雑で多様な社会を生き抜くため、多くの試練に挫けない心を育てる。 また、思いやりと公共心を身につけさせ、礼儀正しい行動や言動をさせるなど、看護や福祉に関わることのできる社会人の育成を目指す。		
項目(担当)	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
総務部	防災教育において、自ら考え主体的に行動する態度を育成する。	掲示物や配布物を積極的に活用し、防災意識を高める。	４月「防災・減災お役立ちガイド」を配布した。５月、１０月に「防災だより」を配布し、防災意識を高める一助とした。掲示物については、避難経路、災害時下校班の掲示のみになってしまった。
		防災避難訓練を通して、災害発生時の自助力・共助力を育成する。	第１回防災避難訓練において避難経路の確認、シェイクアウト行動の実施、災害時の家庭との連絡方法の確認など行った。第２回防災避難訓練においては火災発生時の総合訓練を行い、災害時の行動の確認ができた。体験的な活動については不十分であった。
教務部	自ら学び続ける態度と姿勢を育成する。	ＩＣＴを活用し、より主体的な学びの実現を図る。	昨年度までのあいちラーニング重点校としての取り組みを通じ、ＩＣＴを授業に効果的に活用する事例が増え、本年度も継続的に取り組めている。
		スクールポリシーの具体化に向けて	教育課程の変更を検討したり、評価方法や指導に対する見直しをしたりすることで、コンセンサスが高まるとともに、スクールミッションやスクールポリシーを立ち返ることができた。
生徒部	生徒が自ら考え、判断し、行動する能力を育成する。	生徒集会や諸活動・行事を主体的に運営する力の育成を図る。	前年度まで取り組んできたことを慣例として踏襲するだけの活動にならないよう意識した。文化祭のオープニングステージや生徒集会など、生徒会役員が主体となって企画の立案を行い、新しい企画を作り上げることができた。 次年度はさらに、役員の生徒だけでなく、アンケート等を活用しながら、全校生徒を巻き込んで行事を実施していくことを目指したい。
		体系的な防犯教育の充実を図り、自ら考えて判断できる能力の育成を図る。	昨今問題となっている SNS を介した犯罪被害について、防犯講話等を通して指導することができた。不審者被害の報告数は前年度よりも多かったが、いずれも警察や駅員への連絡・報告など、適切に対処できており、大きなトラブルにつながることはなかった。 ＬＴ等で活用できる防犯教育に関する教材開発は途上であるため、次年度も継続して取り組んでいきたい。
進路部	「前に踏み出す意識」を引き出す指導を目指す。	就職・進学指導を通して、主体的な進路選択とその実現のための思考と行動を促す場面や材料を提供する。	指導は計画通り行い、本科３年生全員の進路が年内に内定した。新しい取り組みとして専攻科１年生に対する就職指導を１学期から始めた。進路希望調査の方法も改善して学生の意識喚起を図った。 今後も、就職希望者に対して、成績、欠席日数、きちんとした文章が書けることの重要性を周知していきたい。
		社会人としての基本的なマナーやコミュニケーション能力を身に付ける指導をする。	面接指導に関しては、必要に応じて個別指導も行い、専攻科学生には間もなく社会人になるという意識が見られた。本科でも十分な準備をして臨む生徒が見られた。 面接指導時に限らず、日常の場面で一般的なマナーの指導を心掛けたい。
保健厚生部	生徒が自ら進んで心身の健康づくりをおこなうために必要な資質・能力を育成する。	生徒が、健康的で規則的な生活行動を身につける。	新型コロナ感染症及びインフルエンザの同時流行に対する感染予防対策として、教室の定期的な換気の啓発や適時、手指消毒やマスク装着の実施により継続することができた。
		生徒が悩みや困り感を発信でき、適応課題に適切に対応できるよう相談や支援を行う。	毎月定例で開催する、いじめ不登校特別支援委員会やスクールカウンセラーとの情報共有から、生徒が課題を乗り越えていくための早期対応と支援につなげることができた。また、本年度より、学年別にソーシャルスキルトレーニングを実施した。対人関係や集団行動に活用できるスキルを身につけられるよう取り組んだ。
学校いじめ防止基本方針に基づく取組	いじめの未然防止及び早期発見に対する取組を充実させる。	いじめ防止基本方針に基づき、生徒一人一人の小さなサインを見逃さず迅速かつ適切に対応する。	いじめ不登校特別支援委員会を毎月定例開催し、全職員と情報共有することで、小さな変化やサインを見逃すことなく対応することができた。ソーシャルスキルトレーニングの活用に期待するとともに、いじめを予防するための教育活動を再考し、さらなる取り組みの推進に繋げていきたい。

項目(担当)	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
１年	学習習慣の定着と基本的生活習慣の確立を図る。	基礎・基本を大切にさせるとともに、主体的に学び続ける力を身につけさせる。	課題は概ねの生徒が提出できるが、指示通りに行動できない生徒が非常に多く、指示を主体的に聞けていない。 大事なことが生徒にわかるよう印象付くように説明をし、発問するなどして理解したかどうか確認をする。どのように行動すべきと思ったか、生徒に言葉で言わせてしっかりと認識できるよう促す。
		学校生活に適応し、礼儀正しい言動がとれるよう思いやりのある心を育むことができる。	先輩や教員に対する言葉遣いは比較的よい。係や役割分担した内容を適切にできない生徒が比較的多い。 任された役割がどのようなことをするのか理解できるよう書面で説明し、生徒自身でチェックリストを作成させる。それを元に行動してもらい報告するよう指導し、きちんとできた部分を認める言葉やねぎらいの言葉をかけるようにする。
２年	望ましい勤労観や職業観の形成及び学校活動への主体的に取り組む姿勢を養う。	個に応じた指導を充実させることにより、学習意欲や規範意識の向上を図る。	教員間での連携・情報交換を密にし、きめ細やかな指導を重ねることで主体的に学ぶ姿勢や態度を養うことに繋がった。個に応じた指導を重ねることで、人としてや看護・福祉に携わる職業人としての自覚も培われてきたと感じる。マナーやモラルに関しては、その都度、根拠も踏まえて必要性を指導していくことで規範意識も高まってはいるが、指導を重ねていく必要がある。
		多様化する生徒に対応しつつ、主体的かつ積極的に学校行事等へ取り組む姿勢を育成する。	学校行事での経験を通して、集団としての規律や学校・クラスの帰属意識が強まり、責任ある行動を主体的にできる生徒が増えた。１人１人の取り組む姿勢が行事などの結果や成功体験に繋がり、さらなる主体的な学習活動へと発展した。生徒が段階的に、より多くの学びを得られるよう支援を継続していきたい。
３年	成年としての自覚と責任をもたせ、主体的に社会貢献する態度を養う。	最上級生としての自覚をもたせ、他学年の模範となるような責任ある行動力を育成する。	学校内外の様々な場面で生徒が自ら考え主体的に取り組む機会を設けることで最上級生としての自覚と行動力を身に着けさせることができた。一人ひとりに合わせた対応・指導を心掛け、責任ある行動力の育成に努めていきたい。
		主体的に地域社会の発展に貢献しようとする態度を養う。	進路実現に向けて、個別面談などの指導を重ねることで、生徒一人ひとりの個性を生かした進路へとつなげることができた。引き続き、生徒自らが、主体的に地域社会の発展に貢献できるよう支援していきたい。
衛生看護科	主体的に学び続ける力と人や社会を大切にできる人間性を育成する。	協同学習を通して、主体的に学び続ける力を育成する。	協同学習や看護臨地実習など多様な場面で丁寧な指導を心掛け、気づきや理解力を育成するよう関わってきた。教員間の連携を密に行い、情報共有しながら指導を進めた。ロイロノートを活用した授業展開は各学年で定着し実施できた。 授業の中で有効的に ICT を活用し、思考力を深められるような授業展開を実施していく。
		地域社会や学校行事を通して、柔軟な発想や誠実な態度を養う。	校内行事や看護臨地実習などの活動を通して、他者理解ができるよう場面を捉え指導を繰り返し行っている。経験を積み重ね他者や自己の理解を深めることができるようになってきた。 学年によって理解度に差があるため誠実な態度を実践できるよう指導を継続していく。
福祉科	専門的な知識・技術の定着及び社会や地域に貢献できる人材を育成する。	学習や資格取得に積極的に取り組む姿勢を培うとともに、より実践的な対応力を養う。	わかりやすい授業や課題解決型の授業を展開し、生徒個々に応じたきめ細やかな指導を通して、学習習慣の定着や国家試験へ取り組む姿勢を身に着け、知識・技術の定着を図ることができた。科目間の連携を密に図り、より実際的な介護現場で実践できる技術を育成していく必要がある。
		福祉科行事や校外実習での体験的な学習等を通して、豊かな人間性を育む。	校外実習では、体験的な学びを通して、多くの気づきを得ることができ、他者の気持ちを思いやることができる人間性を育むことができた。校外実習に対して主体的に取り組めていない生徒がいる。次回の実習までに、自ら考えて主体的に取り組めるように個々に指導していく。
専攻科	健やかで知性豊かな人間性を育成する。	看護職に求められる人間性を理解させ、学生が自ら考え行動できるようにする。	協同学習や臨地実習を通して職業倫理の理解させるよう努めた。また、対人能力の強化を図り、課題を解決するために主体的に行動し、他者と協同できるよう働きかけを行った。その結果、積極的に報告・連絡・相談して他者と協同し、職業倫理に基づいた行動ができるようになった。 生活経験が少ない学生が増えてきているため、シミュレーション学習等を通して、具体的かつ実践的な場面での思考を深められる授業展開を増やしていく。

項目(担当)	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
専攻科		専門的な知識と技能を習得するために必要な学習に取り組み、看護師国家試験の全員合格を目指す	一つ一つの知識を統合して活用できるようロイロノート等の ICT ツールを用いて思考の発展を図った。その過程で知識・技能を習得し、思考を発展できるようになった。しかし、知識統合のための枠組みを教員が用意することに慣れて、主体的な取り組みまでに時間がかかる学生も出てしまった。 国家試験の合格に向けて日々の学習の積み上げが大切であることから、学生自身が主体的に取り組めるような働きかけが必要である。
勤務時間の適正な管理及び長時間労働による健康障害防止	業務内容の精選を進め、教育職員のタイムマネジメント力の向上を図る。	愛知県立学校の教育職員の業務量の適切な管理等に関する規則・方針に基づき、在校時間を客観的に把握し、時間外在校等時間の上限(1ヶ月 45 時間、1 年間 360 時間)が遵守できるよう業務改善・勤務状況の見直しを行う。	過去３年間の時間外在校等時間の上限が１か月４５時間を増加した教員の割合は全体の３３．１％と勤務内容も校務分掌、学習・部活動指導と様々であり、教員の長時間労働による健康障害が危惧された。そこで、「県民の日学校ホリデー」の推奨、職員室施錠時間の遵守に取組、一定の成果は得たものの、特定の教員の時間外在校等時間が大幅に増加している現状があった。本年度、以上の取組に加え、日常業務の見直しとして『絆ネット学校連絡網』の「欠席連絡機能」の導入、グループウエアを利用したオンライン化による職員打合せを試みた。結果、時間外在校等時間の上限が１か月４５時間を増加した教員の割合は、２２．２％と１０．９ポイント減少することができた。引き続き、勤務実態把握に努め、教員の学校における働き方改革の意識づけを図り、労働による健康障害防止に努めていく。
総合評価	諸活動・学校行事を通し、生徒が主体的に活動できる環境を整えることができた。教務部を中心に学習指導要領の趣旨の実現に向け、教育課程の編成について再検討し、学習評価や指導法の見直し等においても行った。必要な学習内容をどのように学ばせ、どのような資質・能力を育成するのかを教育課程において明確にすることで、教師の指導改善に繋がった。福祉科においては、昨年同様、あいち産業担い手育成事業「グローバル介護人材育成事業」を実施した。インドネシアから来日した外国人介護職員を招聘し、諸外国の介護事情や介護観等について学びを深めることで、新たな介護観を醸成する機会となった。 労働による健康障害防止については、「県立学校の教職員の心の健康づくり計画」に基づきメンタルヘルスチェックを実施したところ、高い水準にあったことから、メンタルヘルスに関する知識の普及啓発を目的に、外部人材を派遣し校内研修を実施した。次年度もメンタルヘルス対策を重要な課題として取り上げ、気軽に相談できる職場環境づくりの推進に努めていきたい。		